

平成29年度 第67回高知県芸術祭  
第46回高知県芸術祭文芸賞  
入選作品集



高知県芸術祭執行委員会

平成29年度 第67回高知県芸術祭  
第46回高知県芸術祭文芸賞  
入選作品集

文芸賞・文芸奨励賞・佳作



もくじ

〈短編小説〉

芸術祭 文芸賞

鬼の棲む場所

嶋野 幸 1

芸術祭文芸奨励賞

夏祭

星野 巡 5

泡沫散るらん

伊藤 洋二 10

〈詩〉

芸術祭 文芸賞

カヨばあちゃん

笹岡 紀美子 15

芸術祭文芸奨励賞

何色

重田 雅 18

潮江橋

甫木 恵美 20

後日の明日

國友 積 23

母とミサイル

和田 由香 26

佳作

お前だけが

岡本 敏之 31

バスケットボール

鈴木 倫 34

老父母と農業

西山 幸一 36

海への憧れ

松原 一成 39

モノローグ

やまさき・たどる 42

〔短歌〕

芸術祭文芸賞	奥宮武男・宮地咲実・松崎飛陽	中山恭子	45
芸術祭文芸奨励賞	北岡永遠・曾我佳代		45
佳作	高橋治光・多賀一造・廣澤權士 西森政夫・川上理恵		47

〔俳句〕

芸術祭文芸賞	高橋治光・山崎光子・矢野重雄	山下正雄	49
芸術祭文芸奨励賞	山崎紀美子・片岡幸枝		49
佳作	明石韮生・高松一港・松村知香 西込とき・徳弘賀年子・石坂陽太郎 中山久美子・石崎雅男・浜田節		51

〔川柳〕

芸術祭文芸賞		近藤真奈	55
芸術祭文芸奨励賞	濱田久子・岡林裕子・徳永逸夫 桑名知華子・竹内千恵子		55
佳作	熊谷敏郎・さとみみさ・川澤歩佳 近藤 糾・土居志保子・藤田ゆずあ		57

〔審査評〕

〔作品募集要項〕

〔審査評〕	.....	59
〔作品募集要項〕	.....	64

# 短 編 小 說

## 鬼の棲む場所

高知市 嶋野 幸

わたしに背を向け眠る夫の耳に、あの女は誰なの、と囁く。その言葉は、しんと静まった寝室に吸い込まれ、すぐに何処かへ消えてしまう。ベッドサイドのデジタル時計は、午前三時を示している。夫は、すうすうと深く健やかな寝息を立てつけ、わたしはその音に安堵する。

夫が女と手を繋ぎ歩いているのを見たのは、ひと月前、夫の秋物を押入れから出した翌日だった。わたしは、パート仲間と繁華街まで足を延ばして夕食を済ませ、一人で夜の街を歩いていた。夫は、残業つづきでしばらく帰宅が不規則になるから夕飯は外で済ませるよ、と言っていた。その夫が、信号の向こうから、女と手を繋ぎこちら

に向かつて歩いてきた。

一瞬、声を掛けてしまいそうになった。夫が優しく微笑む先と、その女の甘い視線の先を見て、踵を返した。わたしがその日、夫の出掛けに渡したマフラーを、女がしていた。

夫は暑がりだから、まだマフラーは不要だったのだろうか。あのマフラーは、数年前にわたしがプレゼントしたものだ。夫はそのとき、ありがとう大切に使うよ、と言っていたはずだ。忘れていた記憶が、溢れてくる。駅とは反対方向に、ただただ歩いた。夫と女の笑い声が今にも追いかけてきそう、足はどんどん早まった。

気をつけるババア、という声が聞こえて、足が止まった。ババアと言ったのは、わたしの半分くらいしか生きていないような茶髪の男で、男はわたしを見ていた。ババアは、きつとわたしのことだ。あの女は、わたしと夫の娘でもおかしくないような年齢に見えた。そう、ちょうどこの茶髪の男と同じくらい。見つめあっていた夫とあの女の目には、こんなババアは少しも映らなかつた。

う。かつて、夫のあの視線はわたしに向けられていたはずだが、わたしとあの女は、どこで入れ替わってしまったのだろうか。

わたしは茶髪の男の顔を凝視していたらしい。男は怯えたような表情で、黙って見てんじゃねえよ気持ちわりいな、と呟いて後退りし、そのまま何処かへ行ってしまった。

あなたの旦那は優しくていいわね、という数十分前のパート仲間の言葉が、頭の中で響いていた。

わたしね、見ちゃったの。あなたが娘でもおかしくないような女と手を繋いで歩いてるところ。眠りつづける夫に放つ囁きは、次々と暗闇に消えていく。

楽しそうだったね。なんだか、感動しちゃった。あなたがまだ、あんなに愛おしそうに誰かを見つめることができるなんて。

デジタル時計は、音をたてない。夫の寝息だけが響く寝室で、わたしの心拍が加速していく。

ねえ、私たちの子供がきちんと産まれていたな

ら、あの子が今でも生きていたなら、わたしは、あなたを、繋ぎ止めておけたかしら。

問いは、夫の耳には届かない。規則正しく上下する夫の肩を揺さぶり、彼を仰向けにするけれど、目覚めもしない。馬鹿みたいに安心しきった寝顔を見せる夫は、んがっという音とともに健やかな寝息を取りもどす。

白髪の増えた夫の頭を撫でる。これが艶々と真つ黒だった頃、わたしたちはきつと幸せだった。

自分の首に夫の腕を巻きつけて、彼の寝息に呼吸を合わせると、やがて私にも睡魔が訪れる。力の抜けた夫の腕はすぐにだらんと垂れ下がってしまふから、わたしは彼の手を掴んだまま、彼の呼吸に身をまかせる。

夢の中で、わたしたちの産まれなかつた子供は、夫と手を繋いでいた。子供は見る間に大きくなり、やがてあの女に変わっていく。やめて。違う。あなたは、わたしの子宮の中で死んだじゃない。叫ぼうとするけれど声は出ず、夫と女は優し

く微笑みあい、結ばれた手は溶け合って、徐々にひとつになつていく。

目覚めると、時計のアラームがなる朝日の中、夫は眉根を寄せて眠っていた。わたしは身体中に汗をかいていた。アラームを止めて、自分の両の手を握り合わせる。その指ひとつひとつの感触を確かめると、ようやく生きた心地が戻ってきた。

いつもの様に、洗面台で薄化粧をしてから、台所に立ち朝食を作る。冷蔵庫に余っていた野菜をサラダにするため、包丁を握る。ざくざく、ざくと音を立てて細かくなっていく胡瓜やレタスを見て、これがあの女なら、どんなに気持ちが良いだろうと思う。

ベッドに潜る夫を起こし、身支度をさせる。洗面所から出てきた夫に朝食を出すと、夫はまだ眠そうな顔でサラダを食べ、美味しいなと呟いた。

午前一時。今夜も、わたしを起こさないように、夫がそろそろと寝室に入ってくる。ドアに背を向け目を見開き、時計を睨むわたしの顔は、彼から

は見えないだろう。背中に感じる呼吸が徐々に深くなり、彼が眠りに落ちると、わたしはゆっくりと彼の背中に向き直る。夫は、もう何年もわたしに背を向けて眠っている。

気づいてた？わたし知ってるのよ。あなたが、もうわたしを愛していないこと。あの女がいいんでしよう。まだ何も失ったことのないあの女。あの女といると、生きた心地がするんでしょう？

女と酒でも飲んだのだろうか。夫の呼吸からはアルコールのにおいがする。夫に跨ってみても、彼が起きる様子はない。夫の頭を撫で、彼の首に両手をあてがう。少しだけ力を入れると、一緒に過ぎた年月の間に蓄えられた脂肪に、わたしの指がめり込んでいく。夫と手を繋いでいた女の肌は、遠目から見ても摘みたての生花のように滑らかだった。彼と共に時間を重ねてきたわたしは今、どんな顔をしているのだろうか。

あなただけ、ここから逃げようなんて、許さない。

両手にまた少し、力が入る。

「…とよこ、豊子」

暗闇の中で夫が呼んだのは、わたしの名前だった。夫の首に廻したわたしの手に、夫の手が重なる。バクバクと高鳴るわたしの鼓動とは裏腹に、夫の呼吸は再度、健やかなものに変わっていく。寝言だったのだろうか。手を離そうとすると、夫がわたしの手をぎゅうと握り、やがて力が抜けて、彼は眠りに戻っていった。

階段を一段一段、慎重に降りる。心臓が、まだ高鳴っていて胸が痛む。手すりの金属の冷たさが、心地よかった。

洗面所で水を流して手を差し込むと、ざあざあという音と共に、手に張り付いた夫の体温も流れていくようだった。ふと、目の前の鏡を見る。蛍光灯の光の中で、白髪混じりの髪は乱れ、皺に囲まれた目は吊り上がり、浅く呼吸しこちらを見つめる姿は、幼い頃に絵本で見た、鬼婆のようだった。濡れた手で自分の頬を撫でると、水分のない乾いた感触が手に残る。夫の髪が艶々と真っ黒だっ

た頃、わたしの肌はきつと、摘みたての生花のように滑らかだった。

鏡の中の鬼婆は、醜い顔で涙を流していた。

寝室に戻ると、夫は相変わらず眠り続けていた。

ねえ聞いている？あなたは、わたしとあの女が別の生き物だと思っっているでしょう。でも、あの女もわたしも同じなの。ながい年月を共に過ごせば、鬼になるのよ。あなたが愛しつづけない限り、女はみんな、鬼になるの。あなたが誰と一緒にになったって、同じこと。

わたしは今夜も、夫の腕を自分の体に巻きつけ、息を潜めて朝を待つ。

朝になればわたしは化粧をし、かつてあなたが愛していた妻に化けて、あなたを優しく起こすだろう。あなたは、鬼が作った朝食を食べ、いつも通り出掛けて行く。わたしが整えた寢床に毎夜戻り、安心して深く眠るあなたは、その寢床に鬼が潜んでいることに、まだ、気づかない。

## 夏祭り

南国市 星野 巡

東京から高知まで、新幹線と土讃線の座席指定を取っておいたので、車内は混み合っていたけれど、親子三人そろって座ることができた。妻と三歳の息子を連れた一年半ぶりの帰省だ。仕事と家庭のスケジュールの関係で、今月、この八月の下旬に、短いけれど二泊三日の里帰りをすることになっていった。

高知駅に着いたのは、昨日の午後四時頃だった。改札口を出ると、人ごみの中に、少し年を取った父と母が並んで立っていた。

「おかえりー」満面の笑みで顔をくしゃくしゃにして、父が私の息子を抱き上げた。

「おおきゆうなったねー」母は、あやすように三歳児に優しい声をかけた。

今日の朝、悠々自適の父は、可愛い孫といっしょに、庭の木にとまっているセミを真新しい捕虫網でつかまえたり、家庭菜園のキュウリやトマトを収穫したりして上機嫌だった。午後になると、妻と母は買い物に出かけた。父と私の息子は、クーラーをつけた和室で昼寝をしている。私は台所に座って、冷えた缶ビールをちびちび飲んでいた。

遠くの方から、太鼓の小さな音が、ドンドコドン、ドンドコドンと聞こえ始めた。夏祭りの太鼓の音だ。今夜、その夏祭りに、妻と子供を連れて行くことになっている。ドンドコドン、ドンドコドン……。

太鼓の響きは、にぎやかだけれど、どこか哀調を帯びているように思われた。その音に反応して、私の中で何かがうごめいた。何だろう？ そう思っているうちに、一つの思い出が、記憶の底から蘇ってきた――

夜の境内の中央に設営されたやぐらの上で、い

なせな装いの二人の男衆が、スピーカーから流れる盆踊りの唄に合わせて、巨大な太鼓をドンドコドンと調子よくたたいていた。そのまわりを輪になって、たくさんの老若男女が盆踊りを踊っている。

小学六年の時の夏祭りだ。八月の初旬だった。十日ほど前に麻疹を発症し、ずっと家で静養していたが、もうすっかり元気になっていた。久しぶりの外出だった。

一緒に来ていた父が、境内で知人に会い、その人と飲みに行ってしまったので、ごった返す人の群れの中で、私は一人だった。焼きイカを食べながら盆踊りを見たあと、なんとなく心細くなって、もう帰ろうかと考えていた時、後ろから誰かが私の名を呼んだ。

「巡くん！」はずむような明るい声。

ふり向くと、浴衣姿の女の子が、うれしそうに私を見ている。

「幸子！ 大阪から帰って来たの？」

「うん。もうすぐお盆やから」

幸子は前の年に私と同じクラスだったが、その学年が終わる頃、何の予告もなく、実家に祖父母を残して、両親と共に大阪へ引越して行った。私は幸子に好意を持っていた。幸子も私に優しくかった。それなのに、さよならも言わずにいなくなってしまったので、とても悲しかった。だから半年後の今、こうして再会できて、天にも昇るほどうれしかった。

幸子は一人で来ているようだった。私たちは露店を一めぐりした後、河原に座って夜空の花火を見上げた。夢のように時間が過ぎた。

「もう帰らないと。家まで送ってくれる？」

「うん」

帰り道を歩いていると、灯りがとだえて真っ暗になった。足許で川の音が大きく響いた。

「こわい」小さな声で幸子が言った。

初めて、幸子の柔らかい手を握った。

カエルの大合唱の中を、私たちは手をつないで、川と田圃に挟まれた夜道を歩いた。

幸子の実家の灯りが見え始めた。

「ここでもいい。ありがとう。あした会いに来て。約束よ」

幸子の後ろ姿を見送った。ほの白い浴衣のまわりを、螢が二つ三つ舞っていた。

幸子に会ったことは、話すのが恥ずかしかったので、親には黙っていた。

翌日、幸子の実家を訪ねると、彼女の母親が出てきて、「星野くん、よう来てくれたね」と優しい声で言った。和室に案内された。

幸子の顔写真が仏壇にあった。天真爛漫な少女の笑顔。白い布に包まれた箱。たくさんの花。お供え物。美しい提灯——わけが分からなかった。あまりのことに、言葉を失った。

「幸子のために来てくれてありがとう。お葬式は先週、大阪で内々だけでやったけど、納骨は実家のお墓にするから……。それに、もうすぐお盆やから、幸子も古里へ帰りたいだろうと思って、きのう大阪から帰ってきたのよ。納骨がすむまでは、しばらくこっちにいるつもりなの」淡々とした口調だった。

畳に正座し、ぶるぶる震える手を合わせて、幸子の遺影に向かって拝んだ。そして母親に頭を下げて、逃げるようにその家を出た。

幸子のことを何か知っていないか、と母に尋ねた。母は幸子の叔母と親しかった。「黙ってたけど、先週、幸子ちゃんの叔母さんから、秘密の話聞かされたの」と母は顔を曇らせた。そして子供に分かる言葉でゆつくりと語り始めた。次のような話だった。

約十日前、幸子は大阪の大きな川に落ちて死んでいた。自殺か他殺の可能性もあったが、警察は事故死として処理した。検死の際に、握りこぶしほどの胎児が見つかった。少女の転落死の記事が、プライバシー保護のためか、胎児のことはふせて、大阪の地元紙の片隅に小さく載った。報道はそれだけだった。

「幸子ちゃんはまだ子供だったのに、かわいそうに……」母が悲しそうに言った。

今の私なら、幸子の身に何が起こったのか、様々な想像をすることができる。だが、私はまだ

子供だった。ひたすら、運命のむごさに打ちひしがれていた。幸子が死んで悲しかった。シヨックだった。誰もいない所で、私は声を出してひどく泣いた。前夜の不思議な出来事は、自分だけの大切な思い出として、誰にも話すまいと心に決めた。

その日の夜、私は幸子の夢を見た。

幸子と私は、大きな黒い森のそばにいた。

「一緒に行こう」幸子が森を指さした。

そこは死の世界だった。私は、生きてゆかないといけないから森には行けない、と彼女に伝えた。

「どうして生きてゆかないといけないの？　この世は残酷でつらいことばかりなのに」

私は答えられなかった。分からなかった。

幸子は、かなしそうな目で私を見つめた。

「私のことを忘れないでね、巡くん」

彼女は優しく微笑んだ。そして森の方へ歩いて行き、暗い樹の影に消えた――

妻と母が、スーパーの大きな袋をかかえて帰ってきた。襖が開いて、和室から息子が顔を出し

て、「おかえりー」と言うと、彼女たちは「ただいまー」と声をそろえて答えた。

「おやつにしようねー。おじいちゃんを呼んできてちょうだい」妻が息子に言った。

家族五人が食卓を囲んでスイカを食べた。おやつがすむと、父と息子は、庭と菜園に水やりをするために外へ出た。妻と母は夕食の準備を始めた。

私は居間のソファに座って、テーブルに置いてある雑誌を手を取った。父が購読している報道写真の雑誌だ。それをパラパラとめくっていて、あるページに目がとまった。空爆によって廃墟のように崩れた建物の前に、死んだ少女が横たわっていた。細い手足に血が流れている。痛ましい写真だったが、少女は美しかった。まるで眠っているように見えた。二十年前に死んだ幸子のことを思い浮かべた。世界は無慈悲で残酷で、悲しみと怒りに満ちている。幸子の夢を再び思い出す。声が聞こえる。「私のことを忘れないでね」と。

ドンドコドン、ドンドコドン……。いつの間にか止んでいた太鼓の音が、夕方になってまた聞こ

え始めた。今度は盆踊りの唄もかすかに流れて来る。いよいよ、お祭りが本格的に始まりそうな気配だ。

夕食を軽く取った後、妻と息子を連れてお祭りに出かけた。

境内はほんぼりが灯り、人であふれ、太鼓の音に包まれていた。私たちは焼きトウモロコシとかき氷を食べた。息子は、おじいちゃんにもらった小遣いで、玩具のピストルとバルタン星人のフィギュアを買った。

やがて花火大会が始まった。夜空に色とりどりの光の花がパッと広がり、ドン！と腹に響く音が鳴り渡る。私は息子を抱き上げて、肩車をしてやった。小さな両手が私の頭をおさえる。花火を見ながら、自分が子供と一体であることを強く感じ、幸福だった。

家に帰って、息子と風呂に入った。風呂がすむと、二人で夜の庭へ涼みに出た。

虫が鳴いている。私は息子の手を取って、一緒に星空を見上げた。子供との一体感が蘇った。息

子の手をとおして、自分が、大地と世界と森羅万象と、つながっているのを感じた。人はなぜ生きるのか？ 夢の中で幸子に問われた時に始まり、特に十代後半から二十歳を過ぎる頃まで私をひどく悩ませていたその問いに、やっと今、きちんと答えが与えられたと思った。

私は、広大な共生感、すべてのものとの一体感を全身で味わっていた。世界は不条理で、苦しみに満ちている。それでも私は、この世界に生きていることを喜び、感謝していた。

「ホタル！」息子があどけない声をあげる。菜園のあたりの闇の中を、蛍の光が二つ三つ、ゆっくりと動いている。何かを問いかけているように、何かを話しかけているように、青白い光はついたり消えたりしていたが、やがて向こうの方へ飛んで行った。

我が家の夏祭りは終わった。

明日、JRで東京に帰る予定だ。もちろん、座席指定はちゃんと取ってある。

## うたかた 泡沫散るらん

高知市 伊藤 洋 二

「おーい。この二つを額装して、駐車場のシルバールのベンツに積んどいてくれ」

オーナーが、僕と桜本さんと呼んだ。商談がまとまったようだ。今日の商談相手は、横浜で韓料料理店とパチンコ店を何店舗か経営している羅さんだ。

僕と桜本さんは、つい今までオーナーと専務、羅さんが商談していた応接室から、二枚の絵を作業場へと移動させる。デルヴォーとビュッフェの作品だった。

作業台の上に二枚の絵を置くと、縦横の寸法を計り、収まる額縁の号数を確認する。額縁は数あるデザインの中から、桜本さんが決める。美大出身の桜本さんは僕よりちょうど十歳年上だった。オーナーの信頼は厚く、オーナーも作品購入者も

まず彼女が決めた額縁に異を唱えることはなかった。

文京区と新宿区と豊島区のほぼ境目あたり、神田川にほど近い場所に、僕のアルバイト先の画廊はあった。

大学の学生課にあるアルバイト募集掲示板でこの貼り出しを見たのは去年の秋だった。

「絵画の額装のアシスタント」という一風変わった募集になんとなく興味を示して電話してみると、あっさりと採用された。

いざアルバイトし始めると、そこは地方出身の自分にはそれまで縁の無かった、華やかな世界を垣間見る窓のようなところだった。流行のラッセンやヤマガタをはじめ、ピカソ、マグリット、岡本太郎、小磯良平といった芸術家の作品が日々搬入され、安くて数万円、高ければ億単位の値が付いて買われていった。桜本さんによるとごく稀に真贋定かでないものも混ざっているらしかったが、残念ながら僕は作品を一目見て本物かどうかを見極める眼力は持ち合わせてはいなかった。

桜本さんが額縁を決めると、僕の作業の番だ。額縁の大きさに合わせて、額の前面にはめるアクリル板を切り出す。

額縁にはガラス板をはめる場合もあったが、ガラスはアクリルよりも慎重な取り扱いを要した。ガラス板を切り出す時には、普段は近くの別の画廊にいるベテランの男性が作業に来ていた。

アクリル板の切り出しにはちよつとしたコツがあった。

額縁の内側にはアクリル板やガラス板をはめるための溝が入っているのだが、四角に組み上げた額縁の溝にぴたりと収まるようにアクリル板を切り出しにはいけない。絵を置いた部屋の温度が高くとアクリル板が膨張し、波打つ場合があるからだ。アクリル板は額縁の溝の寸法よりも数ミリ小さく、それでいて室温が下がって収縮しても溝から外れないサイズで切り出さなければならなかった。

アクリル板に専用の定規を当てながら、これもまた専用の先端に人工ダイヤモンドが埋め込まれ

たアクリルカッターで薄く切れ目を付けていく。カッターの先から削り出されたアクリルの透明なくずが、釣りに使う天蚕糸テックスのようになると巻いていく。最初に入れた切れ目の上を寸分の狂いもなく何度かなぞって、少しづつアクリル板に切れ目を入れて切断する。なぞるべき場所から刃が逸れて、アクリル板の表面にキズが入るとその板は使えない。キズを付けると、別のアクリル板を最初から切り出さないといけないので、時には畳ほどの大きな一枚が無駄になることもあった。かといって、失敗したからアルバイト代からアクリル代を引かれるということはない。なんとなく、すべてが大らかな職場だった。

大らかといえば、作業場にはいつもFMラジオが流れていて、脇目もふらずに作業一辺倒といった雰囲気でもなかった。

この数年、新しいFM局がいくつか続けて開局し、ちよつとしたFMラジオのブームめいた感じがしていた。

ある日、午前中からやたらとクイーンの曲が流

れる日があった。

「この局、クイーン推しすぎじゃないですか？」

桜本さんとそんな話をしていたら、夕方のニュースでフレディ・マーキュリーが急死したことを報じていた。追悼だったようだ。

時には、ホテルのオープンに合わせて全客室に飾る絵の額装を三日以内で、といった発注もあった。そんな時は、桜本さんと僕、僕と違う日のシフトを担当している川谷さんの三人でひたすら作業した。

羅さんが買った絵はやや大きい号数だったこともあって、二枚の額装に小一時間ほど掛かった。カンバスが貼られている木枠をタッカーで額に打ち付けて額装がほぼ終わった頃、専務が羅さんのペンツのカギを預かって応接室から出てきた。

オーナーは複数の事業を展開していて、普段はこの画廊に顔を出すことは少ない。接客や金銭の管理など、実質的な画廊運営は専務がすべてを取り仕切っていた。

専務は四十歳に届くか届かないかくらいの若々

しい気さくな人で、僕や川谷さんにもよく昼ご飯を奢ってくれたり、出張先の名物をおみやげに買ってきてくれた。

「運ぶの手伝おうか」

専務がワイシャツの袖をまくった。桜本さんは小柄なので、こういった大きめの絵を運ぶ時は、僕のほかにもう一人男手があればずいぶんと楽だ。緩衝材で梱包した額のうち、大きい方を僕が、小さい方を専務がペンツまで運んだ。桜本さんはベントの後部ドアとトランクを開けに、キーを持って小走りに先に駐車場へ行った。

桜本さんは、右腕の手首から先のない彼と暮らしている。学生時代からの付き合いで、彼は同じ美大の工芸科の学生だったそうだ。電動鋸での実習中、彼は事故で手首から先を切り飛ばしてしまった。それ以来、桜本さんが日常生活の面倒を見るため同棲しているということだ。桜本さんは彼の結婚を考えているが、両親には猛反対されているらしかった。

ベントの後席に小さい方を、トランクに大きい

方を積み込んだ。

「雨降ってなくて良かったね」

積み込むときに専務が言った。確かに雨が降る中での積み込みは避けたい。今日の空は薄曇りで、どこからか微かに花の香が漂ってくる。木瓜か桃だろうか。近くの神田川沿いでは、もうすぐ桜の蕾が開きそうだ。上京してすぐの昨春、川面一面をピンク一色に染め上げて流れていく桜の花びらは、それはそれは華やかだった。

秋にアルバイトを始めた頃は、都内のどこもかしこも銀杏が燃え上がるように色付いていた。初めて画廊の駐輪場に原付を停めた時、色付いた落ち葉をタイヤで踏みつけたことを思い出す。あれからもう五カ月経った。

事務所からオーナーと羅さんが駐車場へと歩いてくる。オーナー自ら相手をしたということは、今日の取引はかなり大きかったということだ。

「いくらで売れたんですか？」  
興味本位で専務に聞いてみた。

「二つで『イチ』だよ」

「一千万円ですか？」

「そんなに安いわけないだろう」

僕の言葉に専務は吹き出した。一億円ということだ。

「片方が七千万円、片方が三千万円。どっちがいくらかかってことまでは内緒だ」

専務が笑いながら言った。この時は、それからたった三週間後に、このアルバイトをやめることになるとは思いつかなかった。

その朝作業場に顔を出すと、「申し訳ないけど今月末でやめてくれないかな」と事務の金山さんに言われた。オーナーがこの画廊を閉じることにしたという。

画廊が閉じることになった原因は専務だった。絵を数枚、オーナーに内緒で売り払い、タイへ逃げたらしい。被害総額は三億円を超えたということだ。

「信頼して任せてたのにケチな盗みしやがって」  
オーナーはそう吐き捨てた。

最後の日は作業が終わると、桜本さんと近くの

喫茶店でお茶にした。彼女は別の画廊へ移る。なにかあったらやりとりしようよと、それぞれの部屋の電話番号を交換してお別れした。結局、桜本さんとはそれきりだ。

喫茶店から、原付を取りに画廊へと戻った。数時間前までアルバイトしていた建物は灯りも消えて、すっかり人の気配がなくなっていた。駐輪場に置いていた原付のシートはべったりと、どこからか飛んできた桜の花びらに塗<sup>まみ</sup>れていた。

今夜は彼女が部屋へ遊びに来てはいるはずだ。

早稲田通りを西へ原付を走らせた。左手のずっと先には、真新しい都庁が高く聳え立っている。

巨大なツインタワー構造のビルは、宇宙人が攻撃してきたら巨大なヒト形ロボットに変形して東京を守るといふ都市伝説が囁かれていた。

都庁の近くには、これもまた巨大なビルが聳えていて、その四十二階にある美術館には五十三億円のゴッホが展示されている。まるで絵の価値を実感できない金額だ。

五十三億円の絵を盗む泥棒がいるとしたら、ど

んな手段をとるのか想像してみる。夜にまぎれてハンググライダーで屋上に舞い降り、プラスチック爆弾で天井や壁を吹き飛ばして展示室へ侵入するか。専務のように長年にわたってビル内の会社員に真面目に勤めて、ある日突然泥棒としての正体を顕わすのか。いずれにしても、五十三億もする絵は、買い手を探すにも苦労するだろう。

早稲田通りと明治通りの交差点で右折し、新宿のビル群に背を向けた。彼女の待つ部屋へと急ぐ。ちようどバブルが弾ける一年前の、蕩蕩とした春の夜だった。

詩

カヨばあちゃん

高知市 笹岡紀美子

今日は面接じゃった  
明日から働きに行く  
送迎もあるき 楽よね  
賃はあんまり良うないけど  
この年じゃあきねえ  
張り切っている  
九十四歳のカヨばあちゃん  
次の日から朝夕デイケアの車が  
カヨばあちゃんの家に  
お仕事慣れましたか  
うん 大したことはせんき

体操し 歌ったり 踊ったり 歩いたり  
楽しいですか

そう楽しいゆもないけれど

仕事じゃきねえ

しつかり真面目にやらにやいかん

良かったですねお仕事見つかって

うん あんたも働きたかったら

紹介しちゃうぞね やさしい先生じゃき

有難うございます その時は是非

熱帯夜の続いたある朝

カヨばあちゃん宅へ救急車が来た

カヨさん大丈夫ですか

うんわたしやあ大丈夫 息子よね

夕べから腹痛で明け方救急にきてもろうた

付き添いで行ったらええけれど

仕事もあるし あれこれしよって

私が先に逝ってしもうたら 大事じゃけ

心配かけてすまんねえ

ありがとう ありがとうね

どうやらカヨばあちゃんは  
息子さんを看取るつもりらしい

何色

高知県立高知追手前高等学校三年

重田

雅

はあつと手を温めると  
真っ白な息が出てくる  
それを両手で包み込んでみる  
けれどもなんにも入っていないんだ  
どこまでも続く青い海  
その水をすくい取ってみる  
さっきまで青かったのに  
いつの間にか透明になっているんだ  
しゅつと水を吹きかけると

小さな虹ができる  
それにそつと触れてみる  
でも私の手は宙を切るばかりなんだ

こうして目に見えるのに  
近くで見たら透明で  
手にとることはできなくて

遠くに見える私の未来は  
いったい何色なんだろう

## 潮江橋

高知市  
甫木恵美

自転車を走らせ潮江橋を渡る

朝 南から北へ仕事場に向かう  
夕方 北から南へ家路を急ぐ

ある日 橋の下の住人の声がした  
その正体不明のいきものは  
わたしの心をお見通し  
顔色ひとつで何があったか分かるらしい

しゃがれた声が風と共に耳に届く

元気だしなよ

明日は晴れるから

今みえてる景色が世界の全てじゃないよ

最初は空耳だと思った

いや確かにわたしに話しかけている

わたししか知らないことを口にしたから

橋の上で立ち止まって周りをみても

どこから聞こえてくるのか

相手はなかなか姿を現さない

北の空をみてごらん

竜巻のような突風に飛ばされなくて

南の空をみてごらん

渡り鳥が一羽はぐれて飛んでいくよ

西の空をみてごらん

潰れた夕日が街に溶けていくよ

東の空をみてごらん

今宵は月が透き通ってみえるから

橋の下の住人  
その正体をみてみたいから

今日も自転車を走らせ潮江橋を渡る

## 後 悔

幡多郡黒潮町

國

友

積

待ちに待った地鎮祭  
荒神原こうじんばらで子ども相撲大会があった  
みんな貧しかった  
景品の帳面や鉛筆がとても嬉しかった  
僕は相撲が強かった  
何故なら三つ年上のやっさんや正樹君と  
いっつも相撲をとっていたから  
何回も何回も投げられ 転ばされ：  
気がつくと同級生で僕に勝てるものは  
誰もいなくなっていた

その日、僕は沢山の貴重な景品を抱えて

嬉しくて、早く姉に今日の成果を見せたくて  
頑張ったことを褒められたくて  
これをあげると自慢したくて  
踊るような気持ちで帰路を急いでいた

その時、遠くに清茂がうつむいて  
トボトボと歩いているのが見えた  
清茂は僕より二つ年下で相撲が弱くて  
何回だれととってもいつも投げ飛ばされて  
全然景品をもらっていなかった  
傍におじいさんがしゃくりあげる清茂の  
肩を抱くようにして歩いていた

あ、何故！ その時僕は清茂に  
ノートの一つでもいいからやらなかったのか  
あまりにもうつむいてしよげかえって  
施しをするように 馬鹿にするように  
欲張りな僕は 手渡すチャンスを  
一生！ 逃してしまった

若くして逝った清茂の知らせを受けて  
もう随分経つが  
トボトボとうつむいて歩いている清茂と  
おじいさんの姿が  
今でも僕の前を歩いている

## 昨日の明日

高岡郡佐川町  
和田由香

野分の過ぎた深夜二時  
吹き返しの風が  
優しい風に変わり  
木犀の葉擦れの音が  
からからと響いている  
揺れる葉陰の向こうに  
眩しい光

くつきりと白い満月

恐れられた数日間  
厚い雲のその上で

月は  
静かに  
確かに育っていた

犬走りに広がる朝顔は  
二十三本の薔を  
一斉に天に向け  
じつと夜明けを待っている

昨日の明日は今日となり

白い満月は  
天空から静かに  
斗賀野平野の  
今日の始まりを照らしている

## 母とミサイル

高知市 下 元 真 人

天高く蒼い空 雲ふたつみつ よつ

「まだじゃろうか……」

奥歯に挟まった昼食 ニラなかなか取れず

「もうそろそろかよ……」

舌先が痛くなり親指と人差し指 口の中に

「おそいねえ……」

やつと取れたニラ もう一度口の中

「秋刀魚が食べたいよお……」

モゾモゾと 手の甲 蟻一匹

晴れた日の縁側 動かない時間

「やつと来た……ほら 見てみい」

蒼空 ひこうき雲一本 すいいと

「ぐあむまでとどくろうか……」

まっ白いシャツ 針金ハンガー取替え時か  
「てんぐにあたらんろうか……」

天狗高原は通り過ぎたと僕

「トランプ どうするつもりじゃろう」

高い空 ひこうき雲二本に

ほら ぱくぱくすりーがおいかけゆうと僕

思わずクスクス 母きよとん

塀の柿の木 青い実七つ 今朝数えてみた

「おいつくろうか……ぱくく何とか」

庭畑の太りすぎた茄子 夕食は焼き茄子か

遠くて近い 朝の緊迫した臨時ニュース

早く起きてしまった母と

「ぐあむのひと大丈夫じゃろうか」

明日は晴れ 明後日もたぶん晴れ

「じえいあらーどが鳴りだしたちや」

ニラ飲み込むと 山を揺らす昼のサイレン

促され早めの昼食 母はニラ玉にソース

「昼ごはんまだかよ……」

明日は晴れ 明後日も 明々後日もたぶん

弥やの明あ後さ日ってはわからない空  
母とほんやり見上げている  
手の甲の蟻 いつの間にか縁側をいそいそ  
母の腕這い上がる パチン あっ  
まあいいか 夕食は高くても秋刀魚か

佳  
作五編

## お前だけが

高知市  
岡  
本  
敏  
之

戦後の満州

父母と私ら兄弟姉妹は パラチフスに倒れ

「邦人米食禁止令」の中 九歳の私が炊いた

高粱や粟のお粥をすすって 命をつないだ

突然 「病人は明日病院船で引き揚げ」

との指令により 持ち物全てを捨て

身に着ける物を持てるだけ 風呂敷に包んだ

「風呂敷では」と

隣の奥さんが 夜を徹して 帯芯で

四つのリュックを 縫いあげてくださった

翌朝 頭上に重く覆いかぶさる  
毛布とリュックを背負い 列に加わり  
ぞろりぞろりと 無蓋車の待つ駅へ歩いた  
もう 誰が倒れても 不思議ではなかった  
病気で足の立たない子を 抱いて歩くのは  
病癒えぬ母にとつて 容易なことではなく  
その足が急に止まった  
耳の遠い母に 常に指で書いて話す父が  
このとき何と書いたかを 知るよしもない  
首を横に振り 歩けない末娘を  
思いつ切り抱きしめる母を 私は見ただ  
その後 このことを口に出す人は誰もいない  
病院船から見えた 待望の緑の島 祖国日本  
一同歓呼の声をあげ 甲板は嗚咽に満ちたが  
上陸したそのときから 困窮が私達を襲った  
学校の昼食に持参する麦飯はおろか芋もなく  
修学旅行として 参加出来る筈もない  
いつも納金が遅れがちの私に 先生は

「早く」と催促されることは なかった

あれから七十余年 「断捨離」を説く娘に

「ちよっと待ってくれこのリュックだけは」

倉庫の奥に放り込まれた 汚れたリュックよ

お前だけが 私のつらい歴史を知っている

## バスケットボール

高知大学教育学部附属中学校一年

鈴木

倫

コートの中に入りたくて  
でも中の五人にはなれない  
それでも精一杯がんばる  
みんなの練習についていく  
どんだん上手い人が選ばれてゆく  
それでも私はあきらめず  
練習にいく  
だれにバカにされたっていい  
みんなから置いていかれる  
それでも自分の声のでるかぎり  
みんなをおうえんする  
コートの中はどんなふんいきなんだろう

あのじんじょうじゃないくらいの

きんちょうをしつてみたい

コートの中に入り

かつやくしてみた

シユートを打つてみたい

みんなにパスをしてみた

勝ちたい

大きな声で喜びたい

勝利の味を知つてみたい

今日も私は声を出す

## 老父母と農業

南国市  
西山幸一

子供の頃から  
農家の手伝いはしてきた  
今年、僕は退職し  
細々ながら  
農業をすることとなった  
ほとんど仕事をやめていた  
九十二歳の父と  
八十九歳の母が  
今度は僕の手伝いをするようになった  
父は肺気腫を患い立ち仕事はできない  
母は歩行が不安定であり  
軽い認知症を患っている

それでも二人とも

座つての仕事はできるので

ネギをこしらえたりしてくれる

片道三分くらいの畑への行き帰りに

父はシルバーカーを押すのだが

疲れるので途中で一休みする

母は仕事中、同じ話を何度もし

同じことを何度もきいてくる

そんな二人だが

昔取った杵柄で

仕事のスピードは僕より

ずっと速い

仕事の主導権は僕に変わったが

僕だけではまだまだである

三人で農作業をし終えて

シルバーカーを押して帰る

二人の背中を見送る

夕日と夕闇に背中を押されて

シルバーカーの車輪が家路に向かう

平凡で単調な一日が終わると

農業一年生の僕も  
疲れと共に指先の土を見つめる  
夜空の星の光に朝星の光に  
明日の今日の輝きを  
少し向こうを見つめている

## 海への憧れ

室戸市  
松原一成

私の心の中には  
いつも海が広がっている 青い海だ  
あれはカリブ海  
二隻の海賊船同士が戦っている

私が海に憧れたのは  
幼い頃 母に本を読んで貰った時からだった  
宝島や十五少年漂流記 海賊物語など  
特に荒くれ者共が集まる海賊物には  
心が躍り興奮した  
愛と冒険 宝物に命を懸ける男達……  
すっかり魅了された

その夜 夢を見た

野郎共行くぞ！ 私の命令一つで

忠実な手下達は 吊るした繩ロープを振り子にして

まるで軽業師の様に相手船へ乗り込んでいく

私を先頭にして 次から次へと

激しい剣戟戦けんげきせんが始まる

残虐非道で悪名高い奴らを

許しては措けない

海賊にも誇りがあるのだ

船乗りになった私はカリブ海にも行った

紺碧の海だった だが何処からか

髑髏どくろマークの黒旗を掲げた帆船が

不意に現れる様な気がして 緊張した

ここが 彼等が出没し

覇権を争った海域なのだ

私は海賊になり損なったけれども

長い船乗り生活 四十年

海にしか生きられない男の夢は

今も

三本マストに帆をいっばい張って 風を受け

冒険の旅を続けている

## モノローグ

四万十市 やまさき・たどる

地図にもない

小さな小さな村にです

旅人はわたしひとりだけです

もう一年余りものあいだ

このくの中を車椅子でめぐっています

目に映る風景などは

何処も同じにしか見えません

それでも退屈ではありません

そのうえ

耳朶に貼りつけられている

に・ん・ち・しょ・う の五つの音からも  
逃げようとは思っていません

いまは海辺に来ています

そして

わたしが一ばん好きな人の名を

大きな声で呼びたいのですが

記憶の糸が切れているのか

唇を強く噛みしめたただ

残照の儚さに身を措いています

突然 波の音をすり抜けて

「み・わ・こ」と呼ぶ声が

わたしを包みこんだのです

そうです、わたしは「美和子」です

きょうも

拾った記憶のかげらを抱いて

ホテルで眠ることにします

あしたという日を  
待たせてあるのですから

短

歌

芸術祭文芸賞一首

孫と夫男同志の背を丸め秋の厨に碁を打ちてをり

高知市

中

山

恭

子

芸術祭文芸奨励賞五首

コスモスの一枝をもちて出でてゆく仮設住宅最後の一人

高知市

奥

宮

武

男

踊り子の列の後ろを引き締めて広いフラフを振る兄がいた

宮

地

咲

実

春風がたんぽぽ連れて旅に出る着いた所は屋根の上だよ

土佐市立高岡第一小学校六年

松

崎

飛

陽

虹を見る明日いいことありそうだ七色だから七ついいこと

土佐市立高岡第一小学校六年

北

岡

永

遠

考えて悩んだあげくに更新す仕事場まではまだ要る車

高知市

曾

我

佳

代

佳  
作五首

ゆず玉をひとつ湯船に揺らしつつ思うは遠き遠きふる里

高知市 高橋治光

祝宴の焚火赤々と闇を照らし踊る漁夫らは影絵のごとし

四万十市 多賀一造

授業中カメムシ外からのぞいてる授業を受けたい気分なのかな

土佐市立高岡第一小学校六年 廣澤權士

散骨を願ひし翁は川漁師子や孫の手で川へと還る

高岡郡越知町

西

森

政

夫

貧しくともここは原発阻止したる里ぞと空に照る秋の月

高岡郡四万十町

川

上

理

恵

**俳**

**句**

芸術祭文芸賞一句

素麺干す青海原を裂くように

吾川郡いの町

山下正雄

芸術祭文芸奨励賞五句

影ひとつ背向に伸ばす冬遍路

高知市 高橋治光

少年十五歳鰓呼吸してプール出る

南国市 山崎光子

裏畑で芋掘り中と貼り紙す

土佐市

矢

野

重

雄

山寺の障子しめたる白露かな

土佐清水市

山

崎

紀

美

子

漬物と煮物間を置き大根蒔く

高岡郡佐川町

片

岡

幸

枝

佳  
作九句

炭焼きて梁山泊を起<sup>た</sup>ちあげむ

香美市

明

石

葦<sup>ら</sup>

生<sup>ッ</sup>

ひとつづつ書き出す母の年用意

室戸市

高

松

一

港

遠山をなほ遠くして鬼やんま

高知市

松

村

知

香

掃苔や移民の裔の故郷へ

高知市

西

込

と

き

流灯のひとつを母として送る

長岡郡大豊町

徳

弘

賀

年

子

炎昼や土まで錆びし造船所

高知市

石

坂

陽

太

郎

糶台に燦と室戸の金目鯛

室戸市

中

山

久美子

満月に生みおとしたる土佐和牛

四万十市

石

崎

雅

男

赤道のごとつと動く大暑かな

高知市

浜

田

節

川

柳

芸術祭文芸賞一句

宇宙が読んでる地球という漫画

高知市

近

藤

真

奈

芸術祭文芸奨励賞五句

おぼろ月卵のようになり眠る

高知市

濱

田

久

子

ガムシヤラをあばら骨からつまみ出す

吾川郡いの町

岡

林

裕

子

雑学がいてややこしくなる示談

須崎市

徳

永

逸

夫

風評にぐらぐらぐらと百日紅

高知市

桑

名

知華

子

光らない蛍の訳を聞いてみる

高知市

竹

内

千恵

子

佳  
作六句

B判で折れば良く飛ぶ爆撃機

高岡郡四万十町

熊谷敏郎

就活がピアスの穴を突き抜ける

須崎市

さとみ さ

いい事がありそうで無い夏休み

土佐市立高岡第一小学校六年

川澤歩佳

いないいないばあ父になり母を知る

四万十市

近

藤

糾

一本の道を三角形にいく

南国市

土

居

志保

子

あさにでる月はひとりでさみしそう

土佐市立高岡第一小学校三年

藤

田

ゆず

あ

# 審 查 評

## 短編小説審査評

今年の応募作品数は四三編あり、十二歳から九十歳という、幅広い年齢層からの意欲作が揃った。内容もバラエティーに富んでおり、各選考委員が持ち寄った受賞候補作にもかなりばらつきがあった。意見は分かれて簡単には結論が出ず、悩ましい選考会であった。それだけ飛び抜けた作品がなかった、とも言えるし、入賞作と僅差である作品も数点あったということだ。残念ながら入賞には届かなかったが、可能性を秘めた書き手はおり、今後への期待はふくらんだ。

結果、以下の三編を入賞とした。

「鬼の棲む場所」 年月を経た夫婦に潜む闇と狂気。年齢を重ね容貌の衰えを内に自覚している妻は、夫が若い女性と手を繋ぎ歩く姿を偶然目撃してしまう。その女性の首には、夫を氣遣った妻が、朝手渡したマフラーが巻かれている。妻の中にじわじわと膨らむ狂気と、夫との心の落差を描く。ひとの魅力や心の繋がりとというのは容貌だけに集約されるものではないが、女性にとつては大きな問題であることも確か。この若い作者が今後どんな風に人間洞察を深めてゆくかが楽しみである。迫力ある文体が高評価を得た。

「夏祭り」 子供を連れ実家に戻った私はふと、小六の頃

の不思議な出来事を思い出す。突然転校していった幸子と夏祭りでの偶然出会い、楽しい時間を過ごしたのだが、その幸子は今もうこの世のひとではなかったというのを翌日知る。その晩、夢の中に現れた幸子からの問い「ひとはなぜ生きるの」という答えを、今、子供を通して実感として得るのだが、その結着のつけ方がやや大仰過ぎた。文章、構成は整っていただけに残念。

「泡沫散るらん」 バブル期、画廊に勤めた青春の一ページを描いた。作者の体験を生かした作品か。華やかな空気感と、ひとを狂わせた時代性が押しつけがましくなく漂っている。画廊が閉じた後、同僚の女性との再会も叶わなかった、という儚さも作品世界の色となっている。文章も手馴れているが、思い出スケッチという印象を突破するものが要求された。

その他には発想や会話の面白さが話題となった「部屋の中の池のほとりで」（大野明）「眠れない」（上本貴司）、姉の臨終を情感深く描いた「手」（野村土佐夫）、若い女性の心の揺れに挑戦した「もうキャラメルラテは飲まない」（西更紗）、幻想譚「月の砂漠」（吉岡雅菜）らが席上を賑わせてくれた。

（審査員——杉本雅史、若江克己、文責・米沢朝子）

## 詩審査評

応募数六九編。文芸賞は笹岡紀美子「カヨばあちゃん」。超高齢社会は、九十四歳で面接を受けて働きに行く、という元氣印の優等生を生み出した。仕事は体操し歌い踊り歩くこと。ユーモラスで楽しい詩だが、とりわけ終連がよかった。逆縁ということになるけれど、思わず笑いをさそわれる。むろん、不謹慎ではない。

奨励賞は五編。重田雅「何色」。目に見えていた色がいずれも見えなくなってしまう。これらの現象を通して、私の未来は何色？と自らの人生へ問いかけている、その展開が新鮮だった。作者は十八歳。

甫木恵美「潮江橋」。橋の下の住人の声に意表を衝かれた。潮江橋は町中と違って空間的に大きく開かれており、橋の下の住人もまた開かれた心の持主であろう。その心が私の鬱屈した思いを解き放してくれる。

國友積「後悔」。人は日々多くのことを経験してゆく。それは年齢と共に意味に変化をもたらすことも間々ある。そこに生まれてくるのが後悔である。この詩の場合、清茂の若死によってその思いは一段と強くなった。

和田由香「昨日の明日」。「枕草子」に「野分のまたの日こそ、いみじうあはれにをかしけれ」とあるが、この詩では、台風の過ぎ去った深夜から夜明けを迎えるまでの時の

経過を描いて、その筆力は冴えている。

下元真人「母とミサイル」。ペリーが軍艦四隻で来航、大騒ぎとなった時の狂歌は「泰平の眠りを醒さます上喜じょうき撰せんたつた四はいで夜も寝られず」。詩形も発想も違うが、対象に距離を置いてユーモラスにという点は共通である。

佳作は五編。岡本敏之「お前だけが」。断捨離の時代。が、捨てることのできない汚れたリュック。自分史に不可欠の重要資料。

鈴木倫「バスケットボール」。十二歳。願望の助動詞が八回も使われてコートへの思いは切実。精一杯頑張っている。いずれは……。

西山幸一「老父母と農業」。農業人口激減の時代、一人の農業一年生が誕生した。加えて、老父母も一年生の手伝いとなって。

松原一成「海への憧れ」。海賊の出没したカリブ海。海賊にはなり損ねたが、そのカリブ海にも行った船乗り生活四十年の男の夢。

やまさき・たどる「モノローグ」。認知症の詩は多いが、美和子の心の中に入り、彼女の見るもの考えることを描いた異色の一編。

(審査員——猪野睦、長尾軫、文責・小松弘愛)

## 短歌審査評

前年度にくらべ、今年は大幅に応募者が増し、今年は四一四首、一八五名である。(前年度三三〇首、一三二一名)内訳は、岡豊高校二名、附属中四八名、一般からは十代から九十代までの人達であった。附属中四八名は、国語の先生で歌を作っておられる人がいるのかもしれないと思いつながら、高知県は日本の短歌史上に残る、橋田東声、谷馨、北見志保子などがおり、この四八名の中に、そのような歌人が生れる可能性があるのではないかと期待される。

文芸賞

孫と夫男同志の背を丸め秋の厨に碁を打ちてをり

中山 恭子

家族の平和な風景が碁を打つ夫と孫の後背に象徴されており、側にある作者の眼差しが言外に表出されている。

文芸奨励賞

コスモスの一枝をもちて出でてゆく

仮設住宅最後の一人

奥宮 武男

仮設住宅からでてゆく最後の一人が、庭に植えていたコスモスの一枝を名残りの如く持ちて出でてゆくその感慨を作者は傍観者として捉えている。視点の新鮮さは、災害のあとにのみ生れる歌であると思った。

踊り子の列の後ろを引き締めて

広いフラフを振る兄がいた

宮地 咲実

附属中二年生の歌、踊り子と兄との一生懸命な姿が見えてくる作者の眼の暖かさが感じられる。作者と踊り子と兄は知人であろう。ほほ笑ましい作品となった。

春風がタンポポ連れて旅に出る

着いた所は屋根の上だよ

松崎 飛陽

小学校六年生の歌、タンポポの穂が吹く風に飛び立つさまを眼に追っている作者、よく廂などに根をおろして咲いているタンポポを見ることがある。詩情のある風景を捉えている。

虹を見る明日いいことありそうだと

七色だから七ついいこと

北岡 永遠

小学六年生の歌、非常に前向きで明るい少女だろう。下の句が利いている。少女と思ったが少年かも知れない。歌い振りが少し男っぽい感じもする。

考えて悩んだあげくに更新す

仕事場まではまだ要る車

曾我 佳代

初老の人の歌だろう。作者の心の逡巡がこの一首に言い得ていて伝わってくる。

佳作

高橋治光、多賀一造、廣澤權士(高岡第一小学校六年)、

西森政夫、川上理恵

(審査員——梶田順子、中野百世、文責・市川敦子)

## 俳句審査評

応募句数は六三三句。人数一四二名。昨年をやや下回った。九十代から四名、八十代から二二名、十代から二一名。最高齢九十二歳から九歳まで、俳句が幅広い世代から親しまれるのは、心強い。三審査員が予選した七八句について検討し各賞を決定した。

文芸賞の一句

素麺干す青海原を裂くように

山下 正雄

「素麺干す」は、湿度の低い厳寒の候。海を前にするのは小豆島の手延べ素麺であろう。木組みに整然と干し広げる。「青海原」を真白い素麺が断ち切っていく。「裂くように」という印象。初句の字余り「素麺干す」も、四〇〇年もの昔から島人の手仕事として作り続けられている歴史を想い起こさせる。

文芸奨励賞には、次の五句を選んだ。

影ひとつ背向に伸ばす冬遍路

高橋 治光

「背向」は、うしろの方、後方。西日をうけて長い影をひく。沈みゆく日を追ってゆく。遍路は、いつも大師といっしょ。西方をめざしてゆく。「冬遍路」がいい。寒に立ち向かうきびしい修行。行きに行く。

少年十五歳鰓呼吸してプール出る

山崎 光子

鰓は、水生動物のもつ呼吸器、鰓呼吸をして水中の酸素をとる。魚のように、水とともにある少年を、「鰓呼吸して」といった。そう表現する発想がみずみずしい。少年は、のび盛りの中学生。夢みる中学生。目当ては高くオリピックを目指しているかも知れない。

裏畑で芋掘り中と貼り紙す

矢野 重雄

来客に知らせるために、裏の畑にいと門口に貼っておく。宮沢賢治の家の、黒板にかかれた「下ノ畑ニ居リマス」の文字を想いおこす。「芋掘り」で姿もみえてくる。農の生をまっとうする。

山寺の障子しめたる白露かな

山崎 紀美子

「白露」は二十四節気の一つ。秋分前の十五日、九月七日頃に当たる。露もしげくなる。この頃から秋気がようやく加わる。静かな寺がいい。いままで開け放っていた障子も、ようやく閉めきる。外を閉ざす際立つて白い障子が「白露」の「白」と重なって印象深い。

漬物と煮物間を置き大根蒔く

片岡 幸枝

二十十日前後に蒔く。煮大根・漬物大根、間を置いて蒔く。煮大根は、神祭用に、正月用にと多様。漬物大根は、「大根引き」「懸大根」「沢庵漬」とすすむ。年内に収穫し終わる。農の作業は確かにすすむ。代々そうして来たように。

(審査員——植田紀子、味元昭次、文責・橋田憲明)

## 川柳審査評

応募人員は九八人、応募句は四五六句だった。審査に先だって、文芸賞に相当すると思われる句を、三名の審査員で投票したが、残念ながら審査員全員が推薦した句はなく、二名が推薦した句を中心に選考することにした。審査員同士の活発な議論があったことは言うまでもない。最終的に次のとおり決定した。

文芸賞は

宇宙が読んでる地球という漫画

近藤 真奈

人間がこの地球に誕生して以来、この星には自分の欲望を満たすための醜い争いが後を絶たない。人間の命はせいぜい百年、過去と未来を深く考えてみれば一瞬の人生である、その一瞬を人間は戦いに明け暮れているのだ。作者はその醜い争いを漫画と表現したのだ。宇宙の広さはまだ正確には解明されていないが、一億光年以上遠くの天体が判明している。最終的に「宇宙」「地球」とこれ以上ない大きなスケールに圧倒された。

続いて、文芸奨励賞五句。

おぼろ月卵のようになり眠る

濱田 久子

少女がおぼろ月夜に、ゆでたまごを剥いたような表情で眠っているのをイメージした。たまごを茹でるとゴツゴツした殻の下に、薄いきれいな膜があり、その膜に保護されたように純真無垢なゆで卵が現れる。そんな卵を的確に表現した。

ガムシヤラをあばら骨からつまみ出す

岡林 裕子

以前、日本人は働き者というレッテルがはられ、ガム

シヤラに働くことを美德のように言われていた。月に百時間を超えるような残業を強いられた時もあり、現在は長時間の労働が問題になっている。とりあえず、あばら骨に住み着いているガムシヤラを撤去することが重要な課題なのだ。作者は「つまみ出す」と表現したが的確だ。

雑学がいてややくしくなる示談

徳永 逸夫

いろいろな交渉をして、やつと示談が成立しようとしたときである。そんなとき、相手には雑学をかじっているサポーターがいた。これが原因で九分九厘まとまっていた示談が振り出しに戻ったのだ。他人を引っ掻き回す雑学は必要ないと思うが、相手のことや周りも十分考慮して示談交渉に臨まなければならないという教訓かもしれない。

風評にぐらぐらぐらと百日紅

桑名 知華子

「風評被害」という言葉が、東日本大震災でクローズアップされた。原子力発電所で大きな事故があったのが原因である。地元に住む者、特に地元で農業をする人や漁業をする人たちには死活問題である。せつかく作物を作っても、魚を獲っても売れない風評被害。百日紅もぐらぐらと揺れるほどの被害なのだ。

光らない蛍の詠を聞いてみる

竹内 千恵子

蛍が光を失ったらもう蛍ではない。人間社会も同様である。人間性を失ったまま、いのちだけ永らえているのは、蛍が光らないのと同じことなのである。そんな人生に生きている詠を聞くのは、蛍が光らない詠を聞くのと同じことなのである。

(審査員——小笠原望、西川富恵、文責・窪田和広)

# 平成二十九年度高知県芸術祭 文芸賞作品募集要項

五、締切日

平成二十九年九月二十九日（金）当日必着

## 一、趣旨

高知県芸術祭文芸賞は、広く県民の皆様から作品を公募して、すぐれた作品を顕彰し、地方文化の発展と本県文芸の振興を図ることを目的としています。

## 二、主催

高知県・（公財）高知県文化財団

## 三、主管

高知県芸術祭執行委員会

（事務局）（公財）高知県文化財団内

## 四、公募作品の部門

短編小説	一人一編
詩	一人一編
短歌	一人三首以内
俳句	一人五句以内
川柳	一人五句以内

## 六、作品送付先

〒七八一八二三 高知市高須三五三―二

（公財）高知県文化財団内

「高知県芸術祭執行委員会事務局」あて

## 七、発表

平成二十九年十一月上旬に本人及び報道機関あてに通知します。（平成二十九年十二月十七日に表彰式を行います。）

## 八、選賞

・短編小説

「高知県芸術祭文芸賞」一編 表彰状と副賞

「高知県芸術祭文芸奨励賞」二編 表彰状と副賞

・他の部門

「高知県芸術祭文芸賞」一編 表彰状と副賞

「高知県芸術祭文芸奨励賞」五編 表彰状と副賞

他に佳作を選ぶことがあります。

佳作には表彰状と副賞が授与されます。

## 九、応募時の注意事項

・類似（類想）作品の存在が明らかになった場合や、盗作が疑われる場合は、賞の発表後でもこれを取り消すことがあります。その場合に発生した著作権侵害に関わる問題は、応募者の責任となります。また、取り消しにより生じた損害（経費）については応募者に負担していただきます。

## 十、応募条件

未発表作品に限り、応募者は高知県在住者に限ります。

\* 私的な会や学習会で発表した作品、メンバー内での回覧、資料とするための目的で活字化した作品は「未発表」とみなします。

\* その他、上記の基準等に則して、事務局が判断する場合もありますので、ご了承ください。

## 十一、作品への記載事項

①部門名 ②氏名（フリガナ）\*ペンネームご使用の場合は併記 ③住所 ④電話番号 ⑤年齢  
を必ず明記してください。記載場所等は部門ごとに異なります。

## 十二、部門ごとの注意事項

### 短編小説

■ 作品本文は四百字詰原稿用紙十枚以内。

■ パソコンの場合、二十字×二十行で設定してください。フォントは十二以上。

■ 必ず、作品本文にページ番号をふってください。ホッチキス留めは不要。

・ 一枚目：タイトルを明記

・ 二枚目～十一枚目：作品本文

・ 十二枚目：部門名・氏名・住所・電話番号・年齢を明記。

### 詩

■ 作品は本編四百字詰原稿用紙二枚、三十七行以内。

・ 一枚目：一行目上方に部門、作品名、二行目下方に氏名を記入。

（三行目はあけて）四行目から本文を書き始めてください。

・ 三枚目：住所・電話番号・年齢を明記。

### 短歌・俳句・川柳

■ 通常はがきを使用してください。

※ 学校から、まとめて応募の場合は、はがきサイズ

の用紙へ記入しても可。

■全部門とも自由題。作品は楷書・タテ書きで書いてください。

・はがき表面に部門名を必ず記入してください。

・氏名・住所・電話番号・年齢 は作品末尾に記入してください。

\*応募作品は返却しません。

\*個人情報、運営上の管理及び本人への連絡の用途に限り、利用させていただきます。

ただし、入選作品については、在住市町村名、氏名、年齢を公表します。

\*入選作品の著作権は、高知県及び（公財）高知県文化財団が所有します。

### 三、審査員（五十音順）

短編小説	杉本 雅史	米沢 朝子	若江 克己
詩	猪野 睦	小松 弘愛	長尾 軫
短	歌市川 敦子	梶田 順子	中野 百世
俳	句植田 紀子	橋田 憲明	味元 昭次
川	柳小笠原 望	窪田 和広	西川 富恵

### 四、問い合わせ先

「高知県芸術祭執行委員会事務局」

（公財）高知県文化財団内

（TEL）〇八八―八六六―八〇一三

二〇一七年十二月十七日 発行

編集発行 高知県芸術祭執行委員会

事務局 高知県高知市高須三五三―二

（公財）高知県文化財団内

印刷所 高知市城山町三六

西 富 贍 写 堂

（非 売 品）